

外務省  
文書課  
庶務課  
庶務課

八年三月十三日

大隈参議 (大隈)

御用掛

齋藤

平井

河野

舊報理局ヨリ米国人ハウス本國政府へ報告書  
誤文一冊差廻來候處右ハ書籍中ニ御備置相成  
候テモ可然被存候ニ付供一覽候也

舊報理局

新地事務局

(印)

米人ハウス本國政府ニ報知セシ書

譯文 壹冊

石者當局ニ於テ致騰寫候處別段入用モ無之書  
ニ付御局丹籍中ニ御備置相成候ハ、可然候ト  
存候ニ付則及御送致候也

明治八年三月 舊 鞆 理 局

舊 蕃 地 事 務 局

御 中

蕃地事務局

米人ハウス本国政府ニ報知シタル書訳文

臺灣事件結末

審判書局

審判書局

臺北地事務局

於日本東京千八百七十四年十一月廿二日

北京ノ談判勝利ノ結局ニ至リシ旨ノ新聞ヲ見  
テ日本全國拳テ満足慶賀ノ色ヲ顯セリ○國ノ  
利害ニ關係ナキ人民ヲ除クノ外ハ皆和戰未決  
ノ間ニ在リテ此大事ヲ憂慮シ將來ノ景況如何  
ニ痛心セサルモノ無リキ○政府ノ大吏ハ勿論  
全國ノ人民ニ至ルマテ皆此事ノ戰爭ニ至ラサ  
ルヲ希望セサルモノナシ然レ氏當時台灣ノ事  
件ニ就キ施設セシ方略及日本ノ權利ヲ伸達ス  
ル至意ハ確乎トシテ變動セス如何ナル艱難危

險ヲモ顧ミサルナリ○故ニ北京派出使節ノ談  
判ハ其議論ノ方向ヲ充分平和事ヲ破ラサルニ  
定メ而シテ國內ノ政府ニ於テハ若シ萬一其議  
整ハス國ノ名誉ニ関スルニ至レハ到底戦ヲ為  
スヘキ準備ニ着手セリ○天子皇族貴族及平民  
各其志ト其身代トニ應シテ多少ノ献金ヲ為シ  
以テ戦争ノ費用ニ供セントセリ○官吏ノ勸諭  
告示ヲ俟タスシテ國民往々義兵トナリ兵籍ニ  
加リ戦地ニ赴カント欲シ其准許ヲ請求セリ○  
事務局ニ於テ一時ハ全國ノ諸部ヨリ蝟集スル

華北事務局

二  
一  
處ノ献金助力等ノ願書ヲ受付ケ之ヲ勘考スル  
ニ就キ極メテ繁劇ナリシ○政府ニ於テハ其志  
ヲ嘉シテ献金ハ一切之ヲ謝辞シ若シ將來政府  
ノ入費浩大ニ至リ財務滯滞スル事アラハ必ス  
隠ス所ナク人民ノ助力ニ倚頼スヘキトヲ指令  
セリ○諸官省ノ録事ヲ見ルニ唯和戦未決ノ時  
ニ當リテ此ノ如ク全國ノ人心振起シテ公衆ノ  
安危ニ慷慨セシト古今其例甚々鮮シ恰モ我聯  
邦南北ノ乱起リシ時北部ノ人民ノ意氣ニ彷彿  
タリ○全國ノ人氣此ノ如ク振起セシニ依リテ

華北事務局

局外ノ傍觀者ハ政府及人民拳テ戦争ヲ希望シ  
其勢自ラ事故ヲ求メテ之ヲ挑ムニ至レリト信  
認セリ然レト決シテ右等ノ意ハナカリシ○夥  
多ナル戦具ヲ集メ盛大ナル戦艦砲銃ヲ支那ニ  
近キ海港ニ備ヘ國中ノ人民ヲ召募スル等ハ全  
ク國ノ安寧ニ缺クヘカラサル預備ヲナスニテ  
アリシ○此準備アリシニ依リテ日本ヲシテ萬  
一兵端開クルニ於テハ大ニ其勝算ヲ握ラシメ  
ンノミナラス尚大ニ平和ヲ招ク謀約ト為レリ  
○抑モ名湾事件ノ発端ヨリシテ日本ニ於テ占

得セシ處ノ規模ハ極メテ雄烈ニシテ信任スル  
處アリ全ク其名義ノ確實誠正ナルニ出ツ是ヲ  
以テ大ニ支那ノ煽議ヲ聳動スル原因ト為レリ  
○之ヲ要スルニ日本政府及其目代トシテ派出  
シタル使臣ノ準的トセシ處ハ日本政府ハ其臣  
民ヲ保護シ其屈辱ヲ伸雪シ將來保護ノ方法ヲ  
堅固ニスヘキ權利ヲ達セサル可ラサルト一  
大目的ニ凝集シテ動カサリシ但シ此目的ヲ達  
セシカ為メニ謀畫區處スル方略ハ殆ヨリ一定  
スルモノニ非ス○其事件発シテ未タ結局ニ至

支那事務局

北支那事務

ヲサハル間ニハ其意ニ通セスシテ曖昧ノ論ヲ為  
スモノヲ以テ却テ其當ヲ得シト看做ラモアリ  
○然レ氏成丈々平和ノ策ニ依リ勢ニ止ヲ得サ  
レハ兵カヲ用ヒ必ス其目的ヲ達セスシハアル  
可ラサルハ一定不易ノ策ナリ○此事件ノ起リ  
テ未タ禍福ノ判タサルニ方リテ既ニ今日和平  
ノ結局ニ及フヘキヲ洞察シ爰ニ至リテ歡喜滿  
足スル者固ヨリ鮮トセス而シテ全国ノ人民中  
ニテ結局ノ處置及爰ニ至リタル方略ニ就テ一  
人モ不平ヲ抱ク者アラサルナリ

外國人ハ推察スル如ク専ラ此事ニ焦心憂慮セ  
シモノナシ其結局ニ至リテモ中心ヨリ祝詞ヲ  
出セシモノハ甚ク鮮少ナリ之ニ及シテ日本ノ  
勝利一ニノ著明トナシ認許スルヲ支吾扞格セ  
シ者多シ○外國人ニテ日本ノ勝利ト為ルヘキ拳  
勳ヲ忌嫌フ其原因因果シテ何レニ在ルマト問フ  
ニ之ニ答フルノ難キニアラサレ氏茲ニ論辨ス  
ルハ無用ニ屬ス故ニ贅セス然ル所以ハ争フヘ  
カラサル事實ニ起ル○一國ノ交際家ニテ勝利  
ヲ得ルハ他國之ヲ聞テ喜ハサルハ是レ通習

支那事務

ナリ遂ニ和平ノ結局ニ至リシカ故貿易ノ利益  
ヲ鞏固セシニ非スマ然ラハ則チ西國ノ議論一  
定シテ今日ノ形勢ニ及シハ外國人ニ於テモ之  
ヲ賀祝スハキニアラスマ然ルヲ之ヲ忌嫌スル  
ハ何ソヤ○蓋シ日本他國ノ助力ニ頼ラサル而  
己ナラス其故障ヲモ排除シテ偉大ノ事業ヲ成  
シ人民ノ公利ヲ興シタル日本ノ榮譽令聞ハ歐  
羅巴人ノ望外ニ出テ其所欲ニ反スレハナリ○  
唯此忌嫉ノ情アルニ因リテ日本使節ニ隨從シ  
而シテ一定ノ功勞ヲ立ヘキ人物ノ權利ヲモ剥

駐劄英領事館

奪セシナリ固ヨリ外國公使輩ハ其國ノ利益ヲ  
維持スル而已ニテ其職ヲ尽セリトス日本ノ利  
益ハ之ヲ顧ルヲ要セスト雖モ此事件ニ就キ日  
本ノ利益トスル處ハ之ヲ擴充スレハ文運世道  
ニ関ルヲ甚カラサルヲ以テ之ヲ助ケサルノ理  
ナシ○但公使輩ノ所置アリシハ原ト其政府ニ  
尽ス處ノ職掌ニ出ル故ニ之ヲ諒恕スヘシト雖  
モ此國日本ノ困難ニ至ルヲ謀リテ此所置ニ及  
ヘリト云フハ妄語ニシテ取ルニ足ラス○北京  
駐劄英國公使二國ノ中ニ入り殊ニ尽力セシニ

駐劄英領事館



依リテ大ニ日本使節ノ運氣ヲ挽回セリト○下  
文ニ拳ル所ノ使節ノ顛末書ヲ讀ムハ此事ノ  
實ニアラサルヲ示スニ足ルヘシ其故何トナレ  
ハ日本支那ノ兩國ニ駐劄スル公使ノ中ニテ其  
初ヨリ終ニ至ルマテ艱難ノ際ニ方リテ一人モ  
日本ニ對シテ友誼或ハ聲援ヲ為スモノアラサ  
ルト明白ニシテ却テ絶エス事端ヲ求メテ日本  
ヲ惱セシトアレハナリ  
千八百七十四年六月台湾ニ於テ西郷都督ト支  
那使節<sup>「セシボーチエン」</sup>ト應接談判ノ詳細ハ九月

蕃地事務局

五日「ヘラルド」号新聞紙ニ刊行シ右談判決議ノ  
一件ハ直ニ厦門ヨリ電信ニテ報知セリ○按ス  
ルニ日本ハ決シテ其地位ヲ讓ラサルモノ、如  
シ然レハ日本官吏ニテ疑惑ヲ抱キタルト台湾  
ヨリノ書信中ニモ見ヘタレハ其根據ナキニア  
ラサルヘシ支那使節ハ西郷都督ノ談判ニ服シ  
テ復命シタルニ北京政府ニ於テハ更ニ承諾ナ  
シ難シトセリ隨テ支那政府ノ形勢愈々增長ス  
ルヲ以テ其紛議ヲ一定セント特ニ二名ノ使節  
ヲ台湾ヲ主管スル所ノ福建政府ニ派出シテ談

蕃地事務局

判セシム即チ其一員ハゼ子ラルレゼントルニ  
シテ外國人ニテ日本政府ノ高位ヲ得タルハ更  
ニ二人トナキモノナリ抑モ此一挙ハ其趣旨平  
和ヲ維持スルニ在ルハ衆人ノ信認スル所ナル  
ニ支那在勤米國士官ノ指令ニヨリレゼントル  
捕縛ニ過ヒ審判ノ為メ上海ニ送致セラレタリ  
然レ氏何等ノ罪科アリテ斯ル處置ニ至リシカ  
ハ今日ニ至ル迄判然タルナシレゼントルハ  
上海ニ至リテ忽チ放解セラレタレ氏既ニ事業  
ノ機會ヲ失シテ遂ニ大久保大臣ノ一行中ニ連

支那地事務局

リテ一同北京ニ赴キタリ但シ大久保ハ貴顕ノ  
大臣ニテ頗ル才カアル人ナリ此一行ノ天津ニ  
着シタルハ九月二日ニシテ使命ヲ談判ハ此日  
ヨリ始マルトスヘシ○世評ニ據レハ最初大久  
保氏支那官員ト位地ノ尊卑ヲ論シ直隸總督李  
鴻章ト往復スルニ異論アリシト云フ然レ氏天  
津ニ於テ互ニ相當ノ敬禮ヲ脩メタレ氏此地ハ  
談判ノ事件ヲ處分スル所ニアラサルヲ以テ一  
モ往復致シタルナシ十一月其日亦ニ帰ルノ  
途中大臣英ニ總督互ニ訪問シテ真ニ敬禮ヲ尽

支那事務局

シタリ使節ハ六日ニ天津ヲ祭シテ十日ニ北京  
ニ着シ翌ノテ會議ヲ起セシハ十三日ニシテ其  
決議ニ至ル迄七週日間ヲ経タリ但シ此七週日  
間ハ斯ル大事件ト支那人ノ遲緩トヲ回顧スル  
トキハ遷延トセサルヘシ此最初ノ會議ニ於テ  
使命ノ目的ヲ辨明シ遂ニ一決勇進シテ平穩ノ  
結局ヲ謀リ其當然ノ請求ヲ顧ミサルハ信ニ日  
本人ノ英断ト確乎トノ致ス所ニ係ルナリ然レ  
氏支那人ノ議論平穩ヲ常トスルモ一時ハ劇論  
ニ及ヒ總理衙門モ台湾ノ全島ハ悉皆支那ノ管

轄ニシテ一步モ譲ルヘカラサルト主張シ使節  
ハ日本政府ノ命ヲ以テ其所論ハ断然不當トシ  
蕃地ヲ我所轄ニ帰セントシ議論更ニ決定セス  
支那政府ハ台湾ハ我カ所轄ナリ日本人ヲシテ  
滞在セシムヘカラスト云フノミナリ今其結局  
ヲ問ヘハ總理衙門ノ官員大久保氏ノ請求ニ對  
シテ懇切ニ其劇論ノ失ヲ分疏シテ全ク總理衙  
門ノ一官員ヨリ此論勢ニ及ヒタル趣ヲ謝シ石  
ノ議論ハ此事件ノ記録中ニ掲載セサルヲ請  
フニ至レリ大久保氏モ大ニ敬禮ヲ加フト雖モ

支那事務局

支那地事務局

其論ノ登記ヒサルノ一件ハ之ヲ拒ミ日本使節  
ハ此談判ノ顛末一言一句モ決シテ取捨スヘカ  
ラリルヲ主張ス結局支那人ノ願望ノ如ク不快  
ノ論文ハ記録中ニテ取捨セストモ更ニ書翰往  
復ニテ謝スルニ決定シタリ○此談判始リテヨ  
リ數日間ハ外國公使輩ニ於テ干涉セントスル  
モノナカリシニ英國公使ウエーリド氏ハ支那政府  
ト親密ニ無談ニ日本人ノ意見ヲ通知セシメテ  
請求シタリ大久保氏ノ最初主張シタルハ前使  
節副島大臣ノ談判シタルキ總理衙門ニテ生蕃

ハ支那政府以外ノ民トシタル記載ヲ正確ト承  
認セシメテ隨テ日本政府ノ所分ヲ至當ト見做サ  
シムルニ在リ支那政府此議ヲ容ルニ兩國ノ商  
議決スル由ナカリシニウエーリド氏雖ク支那ノ情  
實ヲ探聞シテ漸ク日本政府ノ意見ヲ容ルニ至  
至レリ同氏モ原來台地ハ支那ノ版圖タルヲ  
信用シタルニ今日格ノテ其支那ノ講求ノ當ラ  
ザルヲ覺悟セシメ必然ナリ然ルニ日本ニ於テ  
モ從來台地ノ南邊ヲ支那ノ版圖ト見做シ此信  
認ヲ以テ処置シタルト同氏思考シタルハ稱怪

支那地事務局

支那事務局

ムヘキナリ○柳モウエード氏ノ此事件ニ干渉シ  
クルハ英國貿易ノ為ナリ如何トナレハ一旦兵  
端ヲ開クニ至レハ毎年二億五千万弗ノ貿易忽  
チ地ニ落ルヲ以テ之ヲ維持セントスルノ目的  
ニシテ一日聲援ノ準備ヲナスヲ本邦ニ電報  
セント云ヒシトアリ此事情ヲ日本全權大臣ニ  
通知シタルモノアリシニ大臣ハ是レ即チウエー  
ド氏ノ適當ノ處置ナリト云ヘリ固ヨリ英公使  
ニ於テ日本ニ敵抗スルノ意ナキハ必然ニシテ  
全ク英國ノ貿易ヲ保護シテ衰敗セシメサルノ

志的ニアリ又之ヲ保護スルハ公使ノ職分ナレ  
ハナリ

兩國ノ商議殆ト一月ノ間ヲ經タレ兵事未ダ  
落着ニ至ラザリシナリ諸會議ニ於テ支那人ハ  
殆ヨリシテ其所論甚ク迂遠ナリキ然レ兵支那  
人ハ難船シタル琉球人ヲ其臣民トシテ論シタ  
ルト絶エテ非サリシハ判然ナリ之レ先キニ公文  
申ニテ其屬地クルトヲ要セシ處ノ件ナリ○支  
那人ハ日本國ニ蕃人ヲ直當ニ處置スルノ權ヲ  
當テ許シ可マシトテ堅ク拒ミシカ其理ヲ詰問セ

支那事務局

支那事務局

ラル、ニ至リ支那人ハ更ニ一言ノ答ナカリシ  
○日本人ハ其挙動ヲ窺ヒ之ヲ防禦スルノ準備  
ヲナシタリ然レ氏總理衙門ハ台湾ニアル日本  
ノ兵ヲ班スルヲ希望スル旨ヲ丁寧反復スルノ  
外他言アルヲナシ○終ニ十月十日最後ノ異見  
書ヲ送リテ支那ノ確答ヲ要求シ其反答アラサ  
レハ日本辨理官直チニ帰朝セントスル旨ヲ述  
ヘタリ當時皇帝首府ニ在ラス恭親王モ亦帝ニ  
同行セリ故ニ遷延十四日ニ至リ帝帰府ヲナシ  
十五日正午ニ返朝ヲ得タリ其趣意到底満足ス

ヘキモノニアラサルモ此事件ヲ予穂ニテ結局  
ニナサントノ決定ヲ示セリ○是ニ依リテ復々十  
八日ニ大久保氏ノ寓館ニ於テ會合ヲナス其商  
議ニ支那人ハ尚ホ台湾南部ニ於テ其權利ノ談  
論ハ之ヲ廢センヲ希望スル旨ヲ述ヘタリ然  
レ氏支那人ハ琉球人被害ノ償ヒトシテ相當ノ  
金高ヲ與フヘシト云ヘリ○此會議遂ニ双方進  
近ノ端トナリテ日本大臣モ再ヒ談判スヘキ旨  
ヲ承諾セリ然ルニ十九日ニ至リテ總理衙門ヨ  
リ書ヲ送リテ云ク難事起レリ故ニ嚮キニ建言

支那事務局

北支那事務局  
セシ処ノ如ク其事ヲ決定スルヲ能ハスト此道  
辟リ設ケタルニ就テ之ヲ説明スルニ大ニ困却  
セリ然ルニ支那政府ニイレテ税関ノ首長タル  
英人「ハルト」氏一策ヲ工夫セリ○「ハルト」氏ハ其  
仕ル所ノ政府ノ利益ヲ慮ルハ論ヲ俟ス兩國ノ  
權利ヲ察シテ甚々公平ノ見識アルニ依リ其策  
大ニ總理衙門ノ意ニ副セリ然レハ廿日ニ至リ  
テ總理衙門「ハルト」氏ノ忠告ヲ採用シ其金ヲ出  
スヘキヲ決答セリ但シ此金ハ台湾ノ南部ニ  
於テ日本人道路ヲ開キ家屋ヲ建テ西郷都督ノ

幸ヒタル兵卒ノ屯所等諸土木消費ノ償ニシテ  
罰金トシテ之ヲ出スニアラサル旨ナリ  
大久保氏ハ罰金償金ノ異同如何ヲ意トナサ、  
ツシナリ支那人罰金ノ語ヲ用ヒサル所以ハ他ナ  
シ又シク争論ナシタル日本人台湾ニ至ルヘキ  
ノ權利ヲ割スルナリト而シテ支那人ハ償金又  
ハ謝金ト云フ様カナル語ヲ代用スルモ亦其權  
利ヲ示スニ足ルト思考セリ○之ヲ以テ許諾ヲ  
得ヘカラサルハ勿論ナリ故ニ終ニ他ノ策ヲ設  
ク而シテ此策ハ次日ニ至リ変シタル氏結局ノ談

支那事務局

判ニ至ルノ機會ヲ速カナラシムルニ必要ノモ  
ノトナレリ○斯ノ如クシテ時日ヲ遷延シ木久  
保氏ヨリ面談センコトヲ要スル毎ニ支那人之ヲ  
避ケタリ○終ニ支那政府ヨリ出金スヘキコト  
ナレリ然レ其與フヘキ金高ヲ示サス此度ノ  
約定書ニハ金銀ノ件ヲ記載セズ唯口演ニテ日  
本兵ノ台湾ヨリ退キタル後々一定ノ期限迄ニ  
此金高ヲ渡スヘキヲ約定セリ○此類ノ約定書  
ニ記載セル抵當ハ支那國ニ對シ深ク羞辱トス  
ル處ニテ衙門ノ面議シタル語ヲ以テ充分タル

支那事務

ヘキ旨ヲ陳述セリ然レ此辨解モ容レラレサ  
リシコト明白ナリ○大久保氏云ク支那國ヲ屈辱  
スルコトハ我志ニ非ス然レ其明確ナル語ヲ以テ  
約定書中ニ記載スルコトハ之ヲ廢スルヲ得サル  
處ナリト○兩國ノ談判最中ニ方リテ支那官吏  
竊ニ種々迂遠ノ方計ヲ用ヒ勉メテ日本政府ノ  
此役ニ費シタル金高如何ヲ探索シテ其高三百  
萬テールニ近キヲ發見シ得タリ随テ辨理官ヲ  
リ必ス此金高ノ償ヲ請求セラルヘシト支那人  
殊ニ憂慮セリ○然レ其後日ニ至ル迄談判中曾

支那事務



テ一言ノ此事ニ及フナシ又大久保氏モ事件結  
局ニ至ルノ前 即チ十月廿五日後ハ請求スル金高ノ多少  
ニ論及セウレシトナカリキ蓋シ大久保氏ハ重  
大ナル条約ノ整フ迄ハ此金高ノトハ緊要ナリ  
ト思量セサリシナリ○爰ニ至リテ更ニ泰親王  
自ラ談判ヲ遂ケントヲ申請セリ大久保氏既ニ  
支那人ノ因循ヲ容忍シ難キニ至レドモ之ヲ最後  
ノ談判ト決心シテ其請ニ應シテ十月二十三日  
ニ面會ヲナセリ○支那人此面會ノ発端ニ於テ  
約定書ノ証拠ヲ用ヒサルノ請ヲ既ニ許容サレ

タル如キ語ヲ發シ約定ヲ為スト雖モ文書ヲ以  
テ之ヲ約スルニアラスト云ヘリ大久保氏即時  
ニ答フ諸事此ノ如クナル片ハ時日ヲ延引スル  
モ徒ニ無益ニ屬スト談判モ之ニテ止ミタリ  
○日本人ハ猶豫ナク北京ヲ発程スルノ支度ヲ  
ナシタリ然レモ辨理官ノ心中尚ホ未タ戦争ノ  
意ハアラサリシナリ○日本人ハ支那交際法ノ不  
正ナル謀計ヲ盡ク通曉シテ日本ノ正當ナル利  
益トシテ請求セシ處ノ件ハ之ヲ廢止スルトナ  
キ決意ヲ明示センカ為メニハ断然タル挙動ノ

切要ナルヲ看破セリ○日本ハ二十五日ニ  
至リ都テ帰朝ノ支度成リ且セ子タールレゼン  
トルモ同日ニ発程セント其期甚々切迫セリ恭  
親王此事ヲ聞キ急ニ「ハルド」氏ノ住居ニ至リ同  
氏ニ倚頼シテ大久保氏ニ遣シ其行ヲ留メシ  
ヲ謀レリ○恭親王ハ判然タル語ヲ以テ支那人  
ヨリ陳述シタル和議ノ條中始メテ適意スヘキ  
事件ヲ建言セリ而シテ此建言ハ恭親王意趣ノ  
誠實ニ就テ甚々疑ヲ容レサリシナリ○「ハルド」  
氏ハ承諾ヲナシ直ニ日本辨理官ノ旅館ニ至リ

大久保氏ノ建言セル条約ニ同意ノ証據タル文  
書ヲ得ント欲スル決意ニハ異論ナキ旨ヲ陳述  
スルノ權カヲ有スルヲ云ヘリ此一事ニ於テ  
兩國政府ノ悞和ヲ扶助ス然レ此權限ヲ越エ  
テ日本政府ノ關係スル處ハ之ヲ如何トモスル  
ヲ能ハスト○「ハルド」氏ハ高議ニ於テ支那人ヲ  
扶助セシ處アリト雖此件ハ確然ト論シ難キ  
ナリ○事件既ニ陰暗ニ屬シタレ更ニ一回陰  
暗中ヨリ光輝ヲ突出シタリ○二十五日ノ深更  
ニ及ヒ大久保氏「ハルド」氏ニ告タルニ其建言ヲ

朝鮮事務

容ル、ヲ以テセリ然レモ台湾全島所轄一件ノ  
既ニ疲倦シタル議ヲ再復スルヲ欲セス又適辞  
遷延ナキヲ總理衙門ニテ保証スル迄ハ衙門ニ  
自ラ面會セサルヲト決心セリ○故ニ此間ノ談  
判ハ「ハルド」氏ニ依リテ往復セリ同氏其使トナ  
リ懇懇ニ周旋シテ事ヲ謀リ十月三十一日ニ至  
リテ結局決定ノ會合ヲ遂ケタリ  
支那人ハ公然ト日本兵ヲ台湾ニ出セルヲノ推  
利アルヲヲ兼認シ日本政府ニテ信義ヲ缺クト  
云ヘル諸般ノ譴責ヲ棄テ、自ラ五十萬テール

ヲ出ストヲ告述シ而シテ其事ヲハ盡ク名ヲ記  
シ印ヲ押シ自ラ包管スルヲナセリ各條款ノ  
盟約既ニ成リ殆ト行ハントスルニ至リ支那人  
尚ホ償ノ一字永ク不快ノ痕ヲ留ムヘシト顧慮  
シソノ出セル銀兩ノ一半ハ日本人ノ慘死シタ  
ル家族ノ扶助ニ充テ其一半ハ十月廿日ニ議定  
シタル如ク台湾南部ノ經營築造等ノ費用ニ充  
テントヲ懇請セリ蓋シ支那人既ニソノ久ク争  
論セシ緊要ノ事ヲ失ヒケレハ今鎖々タル此小  
事ヲ以テソノ意ヲ慰メントスル事ノ機會ハ總

事務局

ラ復ヘカラス此事ノ同意ハ衙門ニテ成就セン  
ト思量セシ所ノ事盡ク失敗セシニ由リテ生テ  
ル苦痛ヲ宥メンカ為メナリ此陳述セル請求ヲ  
許ス事ハ辨論思考ヲ俟タサルヘシ如何トナレ  
ハ其請求日本人ニ於テ嘗テ故障ナケレハナリ  
○是ニ於テ講和速ニ成就セリ乃チ條約書ヲ作  
リ押印シテ兩國官員互ニ親睦ノ言ヲ以テ訣別  
シタリ位階恭親王ニ亞ク總理衙門ノ一官人云  
ヘルトアリ台湾ハ恰モ月前ニ過レル雲ノ如ク  
日本ト支那トノ友誼完全ナリ難カリキニコノ

新報

雲今ハ飄散セリソノ雲ハ兩國ノ關係ヨリ自然  
ニ生スル者ニアラス但亞細亞兩帝國ノ為メニ  
ハ齟視スヘキ外國ノ權勢ヨリ生スル者ナリシ  
トヨ曉レリト○右ノ事件ノ好結果ヨリ日本ニ  
増加セル利益ハ明白ニシテ多言ヲ要セス外國  
代辦官ノ東國ニ在ル者ハ大抵殆メハ其所分ヲ  
悦ハサリシカモ日本ハ直ニ關係セル國ニシテ  
實ニソノ事件ニ於テハ總テ議スヘキノ權アル  
ニ依リソノ所分ノ正義ナルトヲ領知セリ日本  
ハ四方ノ威赫勸戒ヲ顧ス自主ノ行ヲ確言表明

セリ日本ハ他人ノ之ヲ破ラントテ劣カセシ處  
ノ自信ヲ定立セリ日本ハ海陸兩軍ヲ習練シ能  
クソノ頼ル處ヲ定メタリ而シテ國ノ名聲ニ関  
スルノ險中ニ在ル片國民ヲ奮起セル愛國熱心  
ノ實カヲ發明セリ日本ノ經驗ニ於テ得ル所ノ  
者ハ各礼中ノ貴重ト文明國各政府ノ尊敬トニ  
於テ得ルモノニ比スレハ更ニ貴ムヘキアリ

三月十三日

達書

陸軍中佐 高柳 邦秀

各通 陸軍省七等出仕 奥 並 繼

陸軍會計軍吏副 福島 行 中

海軍中秘書 古海 長 義

長崎梅ヶ崎祭典ニ付祭主隨行出張被 仰付候  
事